Philip Connell: *Secular Chains: Poetry and the Politics of Religion from Milton to Pope*

Oxford: Oxford UP, 2016. 304pp

藤田憲司

清教徒革命から啓蒙運動初期の時代にかけて目まぐるしく変化する政治的状況，社会の流動を再考しながら，ミルトンからポープまで英詩の伝統と宗教論争との影響関係を読み解くという膨大な仕事は，いかに骨が折れるものであるか，いかに精細さと注意と忍耐とを必要とするか，察するに余りある。ケンブリッジ大学上級講師をつとめる著者Philip Connellの研究範囲はミルトン，マーヴェルからロマン派にいたるまで幅広く，本書もその成果の一つといえる。本書タイトルは著者の注意深い読みとその決意を雄弁に物語っている。クロムウェル賛辞のソネットで，ミルトンは「良心の自由」を規制しようとする教会権力による束縛を「世俗の鎖」(6) と呼んで批判している。教会・宗教的なもの，議会・政治的なもの，王権・国家権力が，入り組んだ複合的な関係にある以上，世俗的なものと神聖なものという区別は単純に線引きできるものではない。本書で「世俗の鎖」をたどる著者は，必然的に文学作品のみならず，「新聞雑誌記者，論客，パンフレット作者が教会権力の本質と機能を論じたその拡散的テクストメディア」(6) の中に，常に揺れ動く多義的な境界線を位置づけながら，鎖の円環をたどることになる。

本書は六章立ての構成，大きく時代を区分して三部からなる。第一部はコモンウェルス，第二部は王政復古，第三部は啓蒙運動という区分になっている。主として扱われる詩人，文人だけでも，ジョン・ミルトン，アンドルー・マーヴェル，ジョン・ドライデン，第三代シャフツベリ伯爵，ジェイムズ・トムソン，アレグザンダー・ポープと多岐にわたる。なかでも共和政から王政復古と

いう大きな政治的変動をその中心部で経験し，その後の詩人たちに大きな影響を与えたミルトンの作品分析は濃密である。

第一部では共和政期および護国卿時代におけるピューリタニズム，クロムウェルの権力掌握によりその中心的勢力となっていた独立派を文脈に据え，ミルトンとマーヴェルの作品が考察される。ミルトン＝共和制擁護論者という評価を決定づけた*Defensio secunda*は，表面的にはクロムウェル擁護を展開しながらも，一方でその宗教改革への批判を暗示しており，クロムウェルのラテン語秘書官としてのミルトンの立場上，それ以上の論評を思いとどまったのだと論じている。この擁護と批判の緊張関係は，ミルトンの友人にして擁護者であるマーヴェルの詩*The First Anniversary of the Government under his Highness the Lord Protector*に「間接的に記録される」(34)。クロムウェルをギリシア神話のAmphionになぞらえる表象は,「生来の執政官」と「神の手先」という二重のアイデンティティを生み出し，“civil authority”と“spiritual authority”(36)の合成を保存することになる。ミルトンのクロムウェルに対する「緊張関係」を敷衍することで，マーヴェルの詩に世俗性と神聖性の和解という意味深な問題を見出すことができるようになるという。つまり，神話表象が二重のアイデンティティを一つにまとめる一方で，その二重性は決して消滅することはなく表象の中に保存されるということである。

さらに第一部後半では，この緊張関係がジェイムズ・ハリントン*The Commonwealth of Oceana*にも表現を与え，それが応報的にミルトンの反ハリントン的共和制擁護の政治思想，宗教思想の発展を誘発することになり，*Paradise Lost*執筆にもつながったと述べられる。王政復古というミルトンにとっては苦々しい経験が，その叙事詩の中に色濃く反映されていて，*Paradise Lost*はこれまで往々にして王政復古との関係で読まれてきた。しかし，Connellは詩作開始が1658年ごろであり，1650年代の共和制下の政治的・宗教的環境との関係で再考するべきだと主張している。

王政復古は宗教界にさらに大きな変化をもたらした。即位したチャールズ2世が信仰の自由を発令，抑圧から自由へという解放が実現するかと思いきや，議会がそれを認めず，宗教論争はますます混迷を深めることになる。議会は，

非国教徒の公職就任を禁ずる地方自治体法（1661年），非国教徒締め出しを強化する礼拝統一法（1662年），5名以上の非国教徒の集会を禁ずる秘密集会禁止法（1664年），非国教徒の聖職者を締め出す5マイル法（1665年）と矢継ぎ早に弾圧を強化した。名誉革命後の寛容法（1689年）も非国教徒の信仰の自由を一部認めるだけにすぎず，宗教対立が終息したわけではなかった。こうした反ピューリタニズムの情勢を背景に，第二部では，「反逆者」「王殺し」の悪評を忍ぶミルトンと，対照的に頌徳文や風刺を武器に立ちまわるドライデンの詩が分析される。

ミルトンの*Paradise Regain'd*の分析でも，詩作時の宗教的コンテクストを慎重に読み込みながら，詩作品に緊張関係を見出すというConnellの手法は一貫している。この詩は荒野のキリストという形象を，つまり真理を追究する苦難を，非国教徒たちが追いやられている“internal exile”（86）の状況に重ね合わせて読まれることが多かったが，それだけではないことが指摘される。著者はサタンのキリスト誘惑の場面を，当時，非国教徒の間で高まっていた王党派志向へと文脈化し読み直すことで，この詩が「世俗的な王国の庇護のもと堕落した教会秩序と和解することへの抵抗を忠告」（91）しているのだという。このようにして，ミルトンの反世俗＝ピューリタニズム擁護という一面的な図式だけでは見えてこない，非国教徒の苦難への連帯感と非国教徒の世俗化批判の緊張関係を見出すことが可能になる。

ドライデンの風刺詩*Absalom and Achitophel*を構成するコンテクストの中核をなすのが旧約聖書ダビデとアブサロムの父子物語，そして，宗教的対立を発端に国王と議会を巻き込む王位継承排除危機（1679–81）である。国王チャールズ2世には嫡子がなく，王位継承権は弟のジェイムズにあった。ところがジェイムズはカトリックであったため，それに反発する人たちが議会に継承権剥奪法案を通そうとした。また，チャールズ2世には愛人たちとの間に多数の子供がおり，そのうちの一人こそジェイムズに対抗して王位継承争いに担ぎ上げられたモンマス公である。こうした王権，政治，聖書，宗教が交錯するトポスの中で，「神聖な聖書を政治風刺に還元してしまう自意識的な自由」（115）こそが，この詩の独創性だとConnellは見て取る。精細な読みはさらに一歩進む。

聖書を媒介することで政治論争を描く手法は*Paradise Lost*に由来し，ミルトンの“civil idolatry”批判が，ドライデンの風刺詩に新たな光を投げかけることになる。ダビデ王の「多産性」とイスラエルの民の偶像製作の対比的関係は，そのままチャールズ2世の「多産性」と議会の世俗性との対立関係に置き換えられる。当時“black Idol”として揶揄されたチャールズ2世の表象と，一方で“the Rabbles God”と表象された議会の対立は，両者の「多義的な関係」(118) を示すものだと論じられる。

第三部は名誉革命以降，17世紀後半から18世紀前半にかけての啓蒙運動初期をカバーしている。分析される主な詩人としてはトムソンとポープがあげられる。先にも述べた通り，名誉革命で宗教論争が終わるわけではない。宗教的なものは新たな展開を見せる。神学とニュートン科学の融合が新たな美学を生み出し，詩作品の中に表現を見出すようになる。トムソンの*The Seasons*である。ニュートン科学とホイッグ政権との連携がコンテクストとなる。この時代の宮廷詩ではニュートンは国の誇りと評され，科学の分野ではニュートンの知的偉業は「正しい理性の栄えある証明であり，その同じ理性でウォルポール政府は人間の自由を擁護した」(192)。トムソンの目まぐるしく変わるテーマを貫いて見通す啓蒙的眼差しが，ニュートン自然神学とホイッグイデオロギーとの連結からくるものであること，その連結は決して“seamless”(197) なものではないという留保が付される。ここでも著者の詩作品に対する慎重な態度は変わらず一貫している。この時代を通して，ニュートン哲学とキリスト教擁護論の関係はウォルポール政権と国教会権力の緊張関係のもとにあり，この議論を進めるためには「詩の直接的な歴史的コンテクストとその幅広い知的史料のさらなる説明」(197) を必要とするからである。

本書の最終章は詩人ポープにあてられる。ポープの詩人としての経歴が如何に政治的対立の中で形成され，そしてその過程において宗教信仰がどのように影響したのかが分析の焦点となっている。まずは*Essay on Man*の出版の経緯が説明される。最初は匿名で出版され，その文才と高い道徳性の融合が評判を博した。その後，理神論論争を背景にその詩の「神学的弱み」(211) がやり玉にあがるも，詩人の友人であるウォーバートンの擁護によって，自由思想・無神

論の批判を免れた。詩人の死後も，ウォーバートンが反自由思想強化の意図をもってその詩を編集したことで，詩人の終生のカトリックという宗教的態度が確固たるものとなる。ヨーロッパ啓蒙思想の優れた哲学詩として評価される一方で，それとは裏腹にイギリス国内での評価はウォーバートンの国教会的考えによって形作られることになる。こうした成功と抑制のアンビバレンスは受容史上にとどまらず，詩そのものにおいても見いだされる。"true Religion and Government" と "Superstition and Tyranny", "a lost condition of natural religion and instinctive benevolence" と "a world of artificial institutions" (215)，こうした聖俗緊張関係が詩を形成し，ポープ自身のカトリックとしてのアイデンティティ形成と関連づけられる。つまり，Connell曰く，詩人にとって「神聖なもの」，「失われたもの」とはカトリックのアン女王治世への懐古"Stuart nostalgia" (216) に属するものなのである。

本書において著者Connellは詩作品を詩作時の政治的および宗教的コンテクストの中に位置づけて詳細に読み解くことを徹底している。そのコンテクストへと向ける眼差しの広さ，深さ，強度は読者にも注意と忍耐と知識とを要求する。ともすると，多義的空間の中，緊張関係で構築された鎖をたどるためだけの長期ツアーに参加しているような感覚を覚えることもある。評者にはその徹底ぶりが苛立ちと同時に畏敬の念すら感じさせるものであった。著者はテキストの緊張関係を作品内で理論的に説明づけて完結させることは一切しない。「世俗的なもの」を理論的に定義づけて作品分析に応用することもない。ただただ膨大なコンテクストと照合して丹念に作品を分析していく。その愚直な作業が，整理された政治的コンテクスト，宗教的コンテクストの秩序の中で新たな作品読解を可能にする。見えない世俗の鎖を手探りで浮かび上がらせることになる。序文で著者は述べている。数年間の調査と執筆のうちに，その議論と射程範囲は当初の意図を超えるものとなった，と。宗教，政治，文学が絡み合う果てしないトポスと向き合うことは，読者にとっても骨の折れる作業である。しかし，それと引き換えに，詩作品の政治的および宗教的コンテクストについての詳細な理解を得られ，そこから詩作品の新たな読みの可能性を発見するものとなっている。